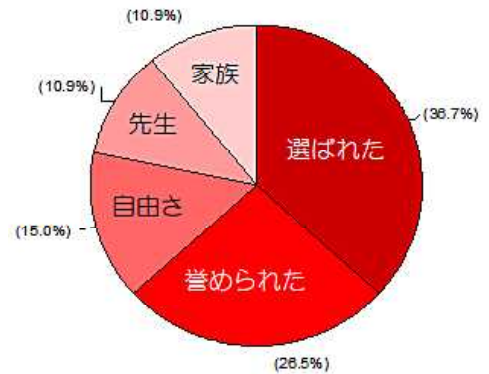


図画工作教育講座 《 褒める 》

好きになったきっかけ

「あなたが図画工作を好きになったきっかけは何ですか？」というアンケートに、中学生から大人まで147人の回答はこれ。



① 選ばれた（55人）コンクールの入賞だけでなく、クラスの代表に選ばれたとか掲示板に張り出されたとかの学校生活の中の小さな選びも、好きになるきっかけになっている。

② 褒められた（40人）授業中の一言が大きな励みになっている

担任の先生から「運動会の絵が上手」と誉められ、すごく嬉しかったのを覚えています。もう30年も前になりますが、誉められた絵の内容、色、全てははっきり覚えています。やはり先生の一言がいろいろな思い出となって残るものなのだと、今になっても懐かしく思い出されます。（30代・女）

③ 図工特有の自由さ（22人）

他の教科に比べ、自分の描きたいものや作りたいものが出来たし、自分の発想で出来たから。（高2）

④ そのときの先生の熱心さ（15人）

⑤ 展覧会やスケッチ大会に連れて行く家族の影響（15人）

褒めることが、図工を好きになる大きなきっかけになる

新卒の先生から

「どこを褒めるのか分からない」「褒めかたが分からない」

そんなときは、

① しばらく見つめて、全体を漠然と褒める「いいねえ、この絵。先生は好きだなあ」

しかし、この方法の有効期間は短い。まもなく子どもは、どこが好きなのか知りたがるようになる。

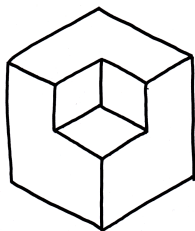
そうしたら、

② 部分を褒める→具体的に褒める 最初は「森の感じが出ている」（部分を褒める）

そして「緑色の変化がすばらしい」（具体的に褒める）

おぼろげの褒め方では、子どもの心に届かない。子どもが見せに来た作品の中に、どこか必ず褒める部分があるはずだと思って作品を見れば、褒める部分が見えてくる。

子ども同士で「いい所見つけ」をするときの例えとして



凹んでいると思えば、凹んで見える。しかし、角にもう一つの立方体がくっついていてと思えば、浮き出して見える。友だちの絵もいい所があるはずだと思っで見つけると必ず見えてくる。

（こうだと決めつけたり思い込んだりせずに、教師が柔軟思考で子どもの絵を見る例えとして、教師の研修会でも、この錯視を活用している）

子どもの絵を褒めることを通して、教師自身の感性も深化し磨かれる。

* 私は、保育園で学童保育のアルバイトをしているのですが、子どもたちは、よく、自分の描いた絵を「褒

めて～」と言わんばかりに見せてきます。そのときの返し方が何時も「すごいね」「上手だね」しか出てこなくて悩んでいたのが、立方体を示しながら先生が「どんな絵にも必ず良いところがある。そう思ってみてみると、必ず見えてくる」と言った言葉が心に残っています。

大学の授業では、「将来、教師になって役立ちそう！」と覚えることが少ないのですが、この授業ではそれを実感しました。

* 褒めることの大切さ。 やっぱり実技の授業で一番大切なのは、これなのかも知れないと思った。子どもたちは、先生に褒められることで、自分の作品に自信を持つことができる。それがよい作品、発想力豊かなのびのびした作品につながると思う。またそこから作品をつくりたいという意欲にもつながると思う。

* 私が、小学校のときに絵が上手い友だちを見てうらやましいなと思ったり、自分の作品を見た先生の顔が曇っていたりと、図画工作の時間は余り好きではなかった。

しかし、大学の講義で、自分が描いた絵が授業中に何度か紹介されたときに、私の絵でも褒めてくれる人がいるのだと、大学生ながらすごく嬉しかった。もし、小学生の頃からこのような授業を受けていたら、きっと図画工作も好きになっていただろう。子どもたちが、図画工作をすることにこのような楽しさを覚えたり、もっと描きたい作りたいという気持ちになるだろう。そのためには、教師は子どもを見守り、ときには手を貸しながら、一人ひとり进行评估してあげなければいけないと痛感した。

上手に描くことが必ずしもいいことではないし、出来ないなら出来ないなりに一生懸命自分を表現している子どもたちを褒めたり認めたりしながら、図工嫌いの子どもの数を減らすことが出来るような教師になりたいと思う。

* 重要だと私が感じたのは、子どもの技術の高さではなく、表現の工夫を認めることである。理由としては、技術はどうしても個人差があり、それを埋めることは難しいが、表現の工夫は、各自の個性であり、個性には「差」は存在しないからである。

* この講座で学んで最重要と思ったと同時に心に響いたのは「子どもの思いが伝わってくる作品がよい作品なのである」というフレーズだった。

私は今までずっと絵が苦手で、絵の得意な子、上手な子の作品がとても素晴らしいものに見え、自分にはとうてい描けないという劣等感を抱いていた。しかし、今回本当に感じたのは、技法だけで判断するのではなく、どれだけ思いが込められているのかも、絵を評価する際の立派な判断材料ということである。

子どもの気持ちを汲み取れない先生にはなりたくない、と誰だって思う。私ももちろんその1人である。だからこそ絵からも、絵に限らず作文や彼らの言葉からも、一つ一つの言動から気持ちを汲み取る大切さが重要だと感じた。

* 私がこの講座で学んだ中で、最も重要と感じたことは、生徒への言葉かけです。

自分は図工が苦手ですが、この講座を受講して、ああこんなふうに褒めてくれる先生がいたなら、自分もきっと下手なりに楽しむことができたのかな、下手でも大丈夫だったのかなと思いました。

図工が好きな子ども、表現豊かな子どもを育てるには、やはり、子どもたちの作品に対する教師の反応、視点を豊かにすることが最も重要なことだと考えました。

* この講座では、予告や参考作品など将来役に立つなあと思うことはたくさんありましたが、「褒めること」が、まだまだ何もできない私にも頑張ればできることだと思い、これを最も重要だと考えました。

批判することは簡単ですが褒めることは苦手なので、授業で言われたポイントは非常に役立つと思いまし

た。

褒めることは、図工以外でも使えると思います。他の人のいいところをいっぱい見つけられる人になりたいというのが、今年の個人的な目標なので友人や後輩、サークルで関わっている子どもたちにも実践練習していきたいです。

* 私は「けなさない」「認めてあげる」ということが心に残った。私も絵が得意でなく、一度何かケチを付けられると「次も何か言われるかも」「やっぱり私は絵が下手だ」と思ってしまい、なかなか絵が進まなかったことを覚えている。

絵というものに、コツはあってもルールはないと思うので、単純に「うまい」「へた」だけで、その人の評価をすべきではないと思った。また、自分自身基底線というものをよく描いていて、なかなか基底線がなくならなかった。そのため、「おむすびころりん」や「かもとりごんべえ」の指導法は大変実用的なものだった。

* 私が重要であると感じたのは「児童の作品を認め、そのよさを褒める」ことです。講義では、学生の作品に対して先生がコメントを述べる時間が多く取ってありましたが、やはり自分の作品が褒められるというのは嬉しいことだと実感しました。小学生であれば、それはなおさらであると思います。先生に褒められ、意欲がでて、また次の作品も頑張れる、ということが繰り返されていけば、図工が好きな子どもはもっともっと増えていくと思うので、このことはとても重要であると感じました。

* 私は絵を描くことは好きだけど、図工の時間は嫌いでした。それは、自分なりに絵を描いていたら、担任の先生が説明した方法と違ったらしく、いきなり怒られました。そのときは、話を聞いていなかった私が悪かったなと思っていましたが、今考えると、もう少し別の手立てが在ったのではなかったかと思います。それから絵を描くのが少し怖いと思うようになりました。

中学になって、美術の先生にデザインの作品を少しだけ褒められました。それでデザインがとても好きになって、美術の時間が楽しいものになりました。先生の一言で、子どもの表現の力を狭めたり広げたりすることが、ふり返ってみてもよく分かりました。

* 私が特に印象に残ったのは、褒め方です。「似ているね」などといった褒め方は、逆に生徒にプレッシャーを与え、表現の幅を狭めてしまう。というのは今まで考えたこともなく驚きで、軽い言葉であるけれども良かれと思ってかけた言葉が、その後の生徒の図工への印象に大きな影響を与えることを考えると、しっかり意識して声かけを行うことが大切だなと思いました。

* 今回の講座を通して美術教育に関する知識が深まって、もの凄く勉強になった。その中で特に最も重要なのは「図画工作の授業に教師が果たしている役割」というところだと思う。

私は小学校時代は絵がすごく下手で、よく先生に叱られていた。もともと絵画に興味津々だったが、一回叱られるとすぐ嫌になった。でも転校して一人の先生に出会い、全然絵が下手な私のことをよく誉めてくださったので、だんだん興味を持つようになってやる気も出た。自分の経験により、すごく「褒める力」の大切さを知っている。